

「星空と路—これまでの記憶、これからの記録—」アフタートーク 島津信子×福原悠介

開催日時：2019年3月9日 10:30-12:15

話し手：島津信子、福原悠介（映像作家）

進行：村田怜央（せんだいメディアテーク）

島津：島津信子と申します。みやぎ民話の会に属しておりまして、長年教員をやっていたけども、いまはフリーというか、自宅におります。

福原：福原悠介と申します。作品をご覧いただきありがとうございます。僕は普段映像の仕事をしていた、民話の会のみなさんとは、メディアテークの「民話 声の図書室」という民話の映像記録を作るプロジェクトと一緒にやらせていただいた関係でお声がけいただき、この『飯館村に帰る』の撮影と編集をやらせていただきました。

村田：進行を務めさせていただく、せんだいメディアテークの村田です。まず、飯館村がいまどういう状況なのかというのをお話しできたらと思うんですけども、2011年の3月に震災と原発事故があって、映像のなかでは仮設住宅に入ったのが6月ごろとのお話がありましたが、ここで結構時間が空いているのは、避難することになってから仮設の準備をするということで、ちょっと遅れたという形になるんですかね？

島津：村で建てた仮設住宅は、7月くらいに完成したと思います。私が関わらせていただいた国見の仮設というのは、福島県の国見町の人たちが地震のために避難する場所として建てた仮設だったんですが、思ったほど人が入らなかった。それで、飯館村がそこを借り受けた形で入られたんですね。だから比較的ほかの方々よりは早く入れたみたいです。

村田：ではやっぱり最初は、飯館村の方たち用の仮設住宅というのは考えられていなかったということですか？

島津：まだ準備が整わなかったということで、国見のほうは早くに出来上がっていたということになると思います。実際の飯館村は、報道でもあったと思いますけども、なかなか避難という形にならなくて、これだけの線量があるということも少し遅れて報道されたと思うんですね。だから村の人たちも最初はわからなくて、そのまま住み続けた方もたくさんいらっしゃるということだと思います。

村田：そして仮設住宅に入られ、みなさん6年くらいそこで過ごされて、2017年の3月に避

難解除ということになりました。帰村された方がもとの1割くらいと聞きましたが、みなさんやっぱりご高齢の方が多いいんでしょうか？

島津：ほとんど、まあ高齢って言っていいかな。60代が一番若いくらいじゃないですか？70代、80代、90代の方が多いと思うんです。私もネットで調べたときに、飯館村の人口は6000から7000人くらいだと書いてあったんですが、いま現在、村に戻った方は1000人くらいかな。だから1割よりは多いかなと思います。ただそのなかには、ここにいらっしゃる佐藤さんご夫婦のように、福島の方にも村にもおうちがあって行ったり来たりしている、そういう方もいらっしゃるの、本当にこの村に純粹に住んでいらっしゃる方というのは、その数よりも少ないのかなと思います。

村田：そして帰村されて、いまご覧いただいたインタビューをしたという時系列になると思うんですけども、最初に飯館村のみなさんにお話を聞きに行ったりして交流を始められた経緯について、島津さんからお伺いできたらと思います。

島津：はい。私は長年民話をやっているの、民話の語り手の方がいらっしゃるかなというようなことや、自分が語れるお話を何かに使えないかなということもあり、震災のあとも教員生活を何年か続けたんですけども、退職のちょっと前に、私たちの仲間の柴田さんという方が国見の仮設に行ってお話を聞いてもらっているというのを聞いて、私も一緒に連れて行ってもらいました。それが最初のきっかけです。まだそのときは在職中だったんですが、次の年に辞めたところで、最初はその柴田さんが「屁ったれ嫁御」の話をしたら、すごいみんな、いままで溜まっていたものがその笑いで吹っ切れたという感じで、柴田さんが行くと「屁ったれ、屁ったれ」と呼ばれるようになったとかそんな話も聞いていたので、私も何か楽しい話ができないかなあと思って。私が行ったときには狐の話をしたんですけども、自分も狐に化かされたことがあるよという話をしてくれる人もいましたし、あと、ここに出てきた花井トヨさんは本当にご苦勞をされた方で、ちいさいころに炭焼き小屋のところでお父さんから聞いたという昔話をいくつか聞かせてくださったんです。このトヨさんのお話と不思議な体験を、こんなおばあさんがいたということで記録しておけないかなと思って、最初はそれを福原さんをお願いして、一緒に行ってもらいました。

そのときに元正さんやほかの方々にも会っていただいて、この人たちの話を記録したいなと思いながら、でも昔話をしているわけでもないしどうだろうなあ、自分でも中途半端な感じでいたんです。その後もときどき行事に呼んでいただいて、私の拙い話を聞いていただいたりしながら少しずつ交流はずっと続けていたものですから、このわすれん！の話をいただいたときに、ああそうだ、何て言ったってやっぱりこの人たちの想いだ。実際に仮設から村に戻られて、最初はみんな、このトヨさんなんかも、ああせいせいしたよっ

ておっしゃるんですけども、その後1年2年と経つうちにだんだんしぼんでいくような気がして、でもやっぱり村に戻って良かったという想いを持っている方々なので、この想いを記録できないかなと思いました。それで福原さんに改めてお願いして、一緒にインタビューというか、お話を聞かせていただいたものです。でも、本当にうまく編集していただいたなあと思っています。

村田：最初に国見へお話をしに行かれたのは、いつごろですか？

島津：最初に行ったのは2013年の12月でした。2014年には、私は「みやぎ民話の学校」という、丸森で行なっている民話に関わる人たちのイベントというか集まりを持っていたんですが、国見の仮設の方々のお話は昔話や民話とはまたちょっと違うものだったので、そのなかでは佐藤さんご夫婦に来ていただいて、体験を聞かせていただいたりしました。あと国見ではないんですけど、松川のほうの仮設にいらっしゃる菅野テツ子さんという方には、昔話を含めていろんな避難のお話とかを聞かせていただいたりしていました。

村田：インタビュー映像となると答えていただく方が固くなってしまいがちかなと思うんですけど、2013年ころからコミュニケーションを取られていただけあって、すごく良い空気でインタビューできているなあと思って見ていました。そうすると、花井トヨさんのインタビューが最初ということですね。福原さんが飯舘村に行ったのはそのときが初めてですか？

福原：そうですね。撮影の前に1回顔を出しに行って、そのときはカメラを回さずに、2回目に行ったときにこの映像を撮影しました。それまでは全然行ったことなかったです。

村田：最初カメラを持って行ったときに、いろいろお話を聞いたりとか、村の様子を見たりすると思うんですけど、印象はどうでした？

福原：本当に平らでだだっ広い、すごくでっかいところなんですよ、飯舘村って。特に目印になるような建物もなく、どこを見ていいのかわからないみたいな場所で。たまにさっき出てきたような、放射能汚染された土を入れたフレコンバッグの山がどーんと出てくるみたいな。そして、人もいない。たまに工事の人がいるような感じで。何をもって印象としていいのかわからないような場所、という感じですね。何を思い出せばいいのかわからない。

村田：そうですね。インタビューに答えていただいている方は、村の良いところとか、明るい感じでお話してくれる方が多いなという印象だったんですけど、その間に挟まる風

景は工事の様子だったり、人がだれもいなかったりして、そのギャップがすごいなど。それでもお話される方からは村への愛情みたいなものがすごく感じられるんですが、外を見ると、以前の村とは状況もたぶん違うじゃないですか。ご近所づきあいとかもだいぶ変わっていると思うんです。でもやっぱり自分の村に対して、帰村された方だからということもあるとは思いますが、すごく強い愛情もあって、そういう部分をみなさんお話されているなと思いました。僕は仙台出身なんですが、自分のこととして考えたときに、仙台に対してそこまで思えるかなと考えると、ちょっと思えないような気がしているんですね。

『飯舘村に帰る』でインタビューに答えていただいたみなさんは、故郷に対する強い思い、愛情みたいなものって、やっぱりすごくあるんですかね？

島津：飯舘村って本当に高いところにあって、作物もなかなかうまく育たない、たぶんお米の収量とかも平らな暖かいところに比べたら少ないかなと思うんです。でもそんななかで、「までえな村」、「までえ」というのは丁寧とか優しいという、そういう思いの村ということで、美しい村百選に選ばれたりしていたところなんです。私が佐藤さんご夫婦に一番最初に村に連れて行ってもらったときは、オオカミの天井絵がある山津見神社とか、ここには酒屋さんがあったとか、ここではコーヒーを出していたとか、本当に村の良いところをいっぱい案内してもらったんですね。ああこんなに大事にしている村なんだなあと、思って、やっぱり私も自分の生まれたところや住んでいるところをこんなに大事に語れるかなあという思いでいました。それが第一印象だったんですね。

そういうところについて、どうしてなのかなと思いつつ、菅野重子さんが、いまは本当に自分の家にデンと座って毎日向かいの山を眺めているんです。おれはこの山見ているのが一番良いんだって言うんですけども、そうですねって山を見たときに、その真下にあのフレコンバッグの山が積んであるんです。重子さんから見たらこの下は見えないかなというぎりぎりの線くらいのところにいっぱいあって、これが現実なんだなという感じですね。これをやっぱりみんなにわかてもらいたいという、そういう思いはやっぱりありましたね。

村田：そうですね。目線というか、自分が愛すべきところは確固としてある。「紅葉が好きだから」とおっしゃっていたと思うんですけども、やっぱり村が好きなんだなというのがあるなと思いました。

では福原さんにお伺いしたいんですけど、カメラを向けてお話を聞かるときに、オンとオフというか、インタビュー撮りますよと言って撮ったときは、やっぱりちょっと空気が変わったりするものなんでしょうか？

福原：そう…でもなかったかもしれないけど、なるべく僕も、人の家に行ってお邪魔して撮るので、余計なことをしないようにしていたというのはあるかもしれませんが。あとは

島津さんが前から親しくされていた方たちだったので、自然にと言ったらなんですけど、あまり余計なプレッシャーは与えなかったかもしれないです。

村田：最後の元正さんは、自分の思い出などを語っていただいたなかで、おひとりだけ男性ということもあるのかわからないですけど、フレコンバッグのことや原発、放射能のこととかに言及されていましたよね。やっぱりそれは、カメラがあるからというところもあったりするんですか？

福原：それは、たぶん元正さんについてはあって、ある種の覚悟を持って撮影に臨んでくれたんじゃないかと思います。撮影の途中に電気屋さんが来たんですよ。ちょっといまから停電作業を10分くらいやっていいですか、というお兄さんが来たんですけど、そして元正さんが出て行って、「いやいまちょっと大事なことでっから、あとにしてくんねえか」って。僕は脇で聞いていて、ああ大事なことでっからだと思って、ちゃんとしなきゃって思ったんですけど。たぶんカメラがあったからああいうストレートな、ダイレクトな言葉を話してくれたというのはあるんじゃないかなと思いますけど、どうなんですかね？ 島津さん。

島津：一応、元正さんにはこの撮影の前に、こんなふうに撮影に行きますからというお話をしに行ったとき、ちょうどキノコがいっぱい玄関先にダーッと並んでいたんです。えーっ、これどうしたんですかって聞いたら、キノコ採りの話が始まって。大丈夫なんですかって聞いたら、大丈夫だ、俺の弟とふたりで山に行くんだっていう話とか、自分はキノコの見分けの先生だから、自分が行っている直売所からは誰もそういう食あたりなんて出したことないっていう自慢話をしてくれたり。それから仮設にいたときも、いろんなところに車で遊びに行ったこととか、楽しい話ばかりしてくれたんですね。だから元正さんがこのときにどんな話をしてくれるかというのは、ちょっと不安なところもあったんですけど、こんなに直接的に話をしてくれるとは思わなかったです。やっぱり覚悟ってあるんだなと思いました。

村田：やっぱり、村の現状を伝えないといけないという想いみたいなものもあったんですね。最後に元正さんがそういう内容を話してくださったことで、前半の方たちが楽しいことや思い出を語ってくれていたなかにも、フレコンバッグがまだあるとか、そういう不安感みたいなものはあるんだろうなと感じて。いろんな複雑な思いを抱えながら村に住んでいるんだろうというのがすごく伝わってくる映像だなと思いました。

島津：最初のおふたりは比較的年齢も若い方々なんですけど、今度こういうふうにしますという話をしに行ったら、あのときいろいろ聞かれることはわかっていたんだけど、そ

れでもやっぱり言い足りなかったということをおっしゃっていたので、まだまだ本当に深い想いがあるんだろうなと思います。

実はここに飯館村の長正さんという方に来ていただいています。

村田：では、来ていただいているので、少しお話をお伺いしたいと思います。

長正：こんにち。長正と申します。この方たちはみんな顔見知りの方ばかりです。この映像を見て、最後の菅野元正さんがものすごく的を射た話をしてくれたなと思ってびっくりしています。実は私もこういう考えです。

いま飯館村は1000人くらいの方が戻ってこられていまして、今月末で一応締め切られますけれども、来年の4月になれば帰ってくる方がいくらか増えるのかなと思っているところです。ただみなさんのお話のように、よそにもう長い間避難して暮らしているものですから、うちを作られたということで、なかなか村に戻ってこられないという方々がだいぶ多くいるようです。私は根っからの飯館の者ですから戸惑いなく戻ってきていますけれどもね。

村田：長正さんご自身は、村で生活をされていて何か思うことはありますか？　いま元正さんと同じ気持ちだとおっしゃっていましたが。

長正：そうですね、すごく不便がいっぱいです。というのはまず、食料品店がないということですね。コンビニは近くに2ヶ所ばかりあるんですけども、それ以外の食料品店がないので、帰還した住民でいま声を上げているところなんですけど、住民が少ないということで、新たに作るということにすごく行政のほうも戸惑っているようです。一番はそこですね。

あとはさっき映像のなかで、歩いている人もいないようだけど、というのがあったんですけども、本当にぶらぶら歩いている方なんかひとりもおりません。ただ、いまでも壊したり作り替えたりということで業者がたくさん入ってまして、映像のなかでも車の音がありましたけど、そういう方はいるんですけども、夜になるととっても静かです。星だけがきれいに見えるっていう感じで。

不便もありますけれども、戻ってきたい人だけが戻ってきているので、帰ってきた人たちはみんな目がきらきらしているというか。老人の方たちの集まりが毎日あって、私も暇があると足を運んでいるんですけども、そこに集まる人たちはみんな生き生きしているんですね。やっぱり帰ってきたいから帰ってきた。無理に戻ってきなって言わなくてもいいんでないかなと、最近思うようになってきたところです。

村田：いまのお話にもありましたが、やっぱりほかのところに家があって、息子さんと

か家族はいるけど、自分だけ村に住んでいるという方も結構いらっしゃるんですね。

島津：ここにいらっしゃる方は、一応ご家族と暮らしていますね。菅野重子さんだけは一人暮らしということになるんですけれども、息子さんが毎日のように来てくれるということで、そういう意味ではまるっきりの不安ではないとおっしゃいますけども。ただやっぱり元正さんなんかもご夫婦とも80歳を超えていますし、トヨさんは息子さんご夫婦と村に戻ったんですが、村に戻って何か月もしないうちにその一番頼りにしていた息子さんが急に亡くなったんです。それもちょっと何でだろうと思われるような亡くなり方で、本当に生活は大変だろうなと思います。

村田：ありがとうございます。そろそろまとめに入ろうと思いますが、島津さんは2013年から飯館村の方たちと交流を始められて5年、6年くらいになると思うんですけど、その時間の流れのなかで、いろんな姿を見たりお話を聞かれたりして、何かみなさんの印象などが変わった部分はありましたか？

島津：仮設にいらしたときは佐藤さんご夫婦がお世話人だったんですね。それで私もずっと、行事のたびに何回もお声がけいただいていたんですけれども、そこからだんだん急に人が減っていく。急に仮設のなかで亡くなる方もいらっしゃれば、引っ越して行ったんだって、ということも聞く。もともと数が多くないなかで、亡くなったときにその親戚の人に知らせたくても、なかなか情報もうまく伝わらなくて。いちいち村の役場を通してでないと、それもあちらからご連絡をいただかないと、亡くなりましたよということも知らされないような状況だったので、大変いろんな、見えないご苦労があったんだと思います。

でもそのころは村に高齢の方が多かったので、戻りたいという想いでいたと思うんですけれども、やっぱりいざ戻ってみて、自分はこれで良いんだっていう、半分ちょっと居直りっぽい感じのね、気持ちもあると思うんですけれども、やっぱりみなさんが、本当に村の将来とか今後を考えたときにうんとよぎるものは、不安の想いなんじゃないかなって思っていますけども。

村田：そうですね。いま居直りとおっしゃっていましたが、どこか清々しさみたいなものがあるのかなと思いながら見ていました。もうここで生きていくんだという折り合いというんでしょうか。息子さんたちと離れたりと、いろいろと悩まれる、葛藤もあると思うんですけれども、それでもやっぱりここで生きていきたいという気持ちがあるんですね。そういうのが、故郷のこともそうですし、あとはやっぱり放射線の被害を受けたというのが、仙台の内陸に住んでいるとなかなか実感しづらい部分があると思うんですね。そのふたつの部分があって、そういうところについて自分はどうだったのかと立ち返る

と、少し考えるきっかけにもなるのかなと思ったりしました。

では、会場の方から感想や質問などを受け付けたいと思うんですけども、何かありますか？

会場A：私も島津さんと一緒に民話を聞き歩いている仲間なんですけれども、今日はありがとうございました。さきほどお話にもあったんですけど、5人の方の表情がとっても良いことが心に残りました。今日はとっても良い映像を見せていただいたなという気持ちと、また一方では、たとえば佐藤祐子さん。お嫁に来て大変な苦勞をされたというようなお話が途中でパッと切れていて、もう少しお話したかったとおっしゃっていたということでしたけど、飯館で暮らしてきて、原発事故に遭って、そしてどういう想いでここに戻ることにしたのか、佐藤祐子さんもだし、みなさんのお話をもうちょっとじっくり聞いてみたいという気持ちも残りました。感想になると思うんですけど。

村田：たぶん、ここに入っていない部分の映像もたくさんあるんですよ。そういったものも何かの形で出していったり、見られる機会があってもいいのかななんて思いますね。

会場B：この話とは直接関係ないんですが、飯館村というのは、行政上今後どういう形でやっていこうとしているのかというのが知りたくて参加したんですけども。見ると60歳以上の方が1000名近く帰られたということなんですけど、長野県にも姥捨という村があって、JRから眺めると自然環境が素晴らしい、段々畑なんかがあってね、環境が非常に似ているなと思って映像を見てたんですけど、なんか表現が悪くて失礼になるんですが、60歳以上の人ばかりの姥捨てっていうような感じの環境になっていて、将来の姿が、行政はどういう形で人を呼んで村を立て直すのかという、ヴィジョンがちょっと見えないのね。七ヶ宿町では、一子には30万、二子には50万、三子には70万、小学校、中学校出るまで学費食費は無料というような形で町おこしをやって、どんどん若い世代を集めようとしているところもあるんで、ちょっと飯館村の将来ヴィジョンが見えなくて、どうなっているのかなというのが私は気にかかりました。

島津：飯館村の小学校、中学校、それから幼稚園、保育所、その世代で一貫の大きな建物というか学校を作られたんですね。いままでの既存の学校も結構立派な建物だったんですけども、そこは線量が心配だということで使わない方針で、大変立派な学校を作られて、いま子供たちが100人くらい通っていると言うんですが、実際は、村に住んで通っている子供は10人くらいでしょうか。それ以外は、福島とか川俣とか近隣の避難先からスクールバスで通っているみたいです。とにかく子供たちを集めたいということで、そのバス代から、経費もすべてタダで、有名ブランドの制服があって。子供たちを集めればその親の世代も集まるんじゃないかということで村としてはやってはいらっしゃるんですが、やっぱ

り七ヶ宿とはまた違うところがあるんだろうと思いますが。

村田：村の外から小学校に通っているというのは、村に住むのはやっぱり不安や心配があるからということなんですよ。そうですね。今後のこととなるといろいろ難しい部分もあるとは思いますが、先のことも重大な問題だとは思いますが、いまはまず帰られて、みなさんが住んでいらっしゃるということですね。

会場C：私は田舎が川俣町の山際なんですけれども、状況としては飯館村と同じで、いまは両親が同じように戻って、行ったり来たりして暮らしています。商店をやっていたので、震災前は、映像に出てきたような方たちが入れ替わり立ち替わりやってきて、おしゃべりをしたりという日常が毎日あったので、今日はそういういろんな人の、ばあちゃんとかじいちゃんの話聞く時間がまたあったような気がして、とても懐かしく思いました。それで、若い人がやっぱり戻ってこられないという状況がいろいろあると思うんですけれども、私も震災当時実家には住んでいなかったもので、出身地として心配という気持ちもあり、ただ実際に住んでいる両親とは違う、当事者と当事者ではないっていう線引きがすごく、家族のなかにもあって。高齢者が戻って、人口が少ない状況で暮らしているということから、私たちはどういうふうにやっていけばいいんだろうということをずっと考えるんですけど、ちょっと答えが見えなくて。たぶん飯館に戻ってきていない若い世代の方々も同じように考えることがあると思うんですけれども、そういったところも聞いてみたいと思いました。

福原：ありがとうございます。そうですね、確かに、帰って来られない、来ない選択をした若い人たちの話というのはあまり聞けなかったですね。島津さん聞いたりしました？

島津：立派な復興住宅が作られたんです。そこに子供さんが3人いる方が戻られたということを知りました。それはやっぱり村を想う気持ちと、たぶん学校が全部タダで、住宅そのものもきっといろいろと恩恵を受けるところがあるのかなあと思います。でもそのお子さんたちがみんな学齢を超えたときに、果たして村に残るんだろうかというところについては何とも言えないので、本当に先が見えないというのが、強い想いだと思うんです。だから佐藤ツメノさん、祐子さんとか、最初のほうに語られた方が言い足りなかったというのは、その部分なんじゃないかなと、私は話を聞いてたんですけれども。

村田：いま、当事者と当事者でないという話もありましたけど、村の外に出てしまうと、そういうことを話しづらかったりもするんですかね？ それで、なかなか話題として挙げづらかったりもするのかなと思いますね。それは仙台と福島とかでもそうだと思いますし、仙台の沿岸部と内陸でも、なかなかやっぱり状況が違ったり、被害が違ったりする

と、気にはしていても話題にしづらいということは多々あることだと思いますね。ただ村の今後ということを考えたら、若い方とかもいれば続いていくのかなという気はしますけどもね。

島津：まだ仮設にいる、帰村になる前に長正さんと話をしたときに、村に戻るの戻らないのということは話題にできないとおっしゃったことがあって。やっぱりそのなかでもかなり揺れながら、この方々は比較的強い意志で、自分だけは戻るんだということで戻った方が多いと思うんですけども、戻らない選択をした方や、いまもうんと迷っている方もいらっしゃるって、どこまでを当事者と言うのかというのは、その立場にならないとわからないことだと思うんだけど、難しいことだなと思います。

村田：そうですね。帰るか帰らないかというのもそうですし、帰っても今後どうするのかということもあるので、いろいろ悩んだり葛藤したりというのはたくさんあるんだろうなと思います。

会場D：活動をされている方や村長の話などはテレビでよく見て、話を聞く機会はありませんでしたが、一般の方のお話をまとめて聞く機会はなかなかなかったので、貴重な声が聞けたと思います。

いま若者のことが出たので、私の知り合いに若い方がいるんですけども、その方は飯舘村には住んでなくて、いまでも大変な状況があるのでそういうことを発信すると、村長からプレッシャーをかけられるというふうに言っていました。そういう状況だから、帰られる方とかが話しづらい状況がどんどんできていくのかなと思います。

あと、さきほどももうちょっと話を聞きたかったという話が出たんですけど、編集におけるポイントというか、入れる話と入れない話というのをどういう観点で切っていったのか、それから先ほど行政の行き先が見えないというお話も出たと思うんですが、村や政治に対して何か不満とかそういうものがあったのかどうか、その2点をお聞かせください。

福原：編集は基本的には僕がやったんですけども、一番気をつけたのは、なるべく震災には直接関係ない話を入れるということですね。最終的には、元正さんの非常にダイレクトなメッセージを僕も現場で聞いてとても感動したので、これを入れたいと思ったんですけども、でも必ずしもそれだけではない、それが結論にならないようなものにしたというのありました。

震災から時間が経って、これからの話というのはいまも出ていたようにとても重要なんですけれども、むしろもっと過去に遡ったり、あるいはもっと遠い未来だったり、立体的に時間が見えるようなものになりたいと思いました。トヨさんの80年前の家出の話とか、基本的に震災には何も関係がないと言えないんですけども、それを80年後に僕らが聞き

て、それを撮影して編集して、いまここで見ているという立体的な時間の流れみたいなもののほうが、むしろ飯館村に震災前から流れていたものを想像するきっかけになるんじゃないかなということです。そういうことを意識しました。あとは元正さんの亡くなった奥さんの遺影とか、震災があってもなくてもその土地でたくさんの人が生きていて死んでいったという歴史があるので、そういう長い時間軸を見せたいというのが編集の意図です。もう一つは何でしたっけ。政治的な…難しいですね。不満はもちろんあったと思いますが、特に祐子さんや重子さん、みなさんそうですかね。でも何らかの意味で諦めないわけにはいかないという、ある種の諦念がみなさんあったと思うので、それを実際にどう考えたらいいか、難しいところですが。不満は絶対にあるとは思いますが、それを言ってもしょうがないというところがスタート地点になってしまっていると思います。

島津：このなかにはいないですけども、インタビューさせていただいたときに、村長さんが帰れっていうんだから私は帰ってきた、という言い方をされた方がいたんです。でも、それは自分が建てたおうちに戻られたということでもあるし、いわゆる町からの圧力であったり政治的なものについては、言葉の端々には出てきますけれども、直接的なものはそんなにはないかなと思います。

ただ、実はトヨさんの息子さんが亡くなった状況というのは、お医者さんは、わかりません、死因がはっきりわかりませんというような言い方をされるんですね。その息子さんも、もしかしたら原爆病じゃないかなと私なんかは思ったくらいなんですけれども。そういう方のお話は、なかなか直接的には表には出てこないことだと思うし、ましてやそういう不安のいっぱいあるところに、子供に帰れとは言えないんだろうなと思います。

村田：だから、みなさん不安やリスクはあったうえで、どこかで折り合いをつけて、でも生きていく。ここで暮らしていくんだみたいなところがあったりするんですかね。その一人ひとりのエピソードや想いみたいなものを記録して編集していただいたことで、飯館村のお話なんですけど、飯館村でなくてもという大変ですが、すごく広く捉えられるような作りになっていると感じました。いろんな想いがあり、葛藤のなかで暮らしているというのがすごく感じられて、自分自身も震災のことをまた考え直すときに、すごく良い映像だなというふうに思っただけです。

ではそろそろ時間ですので、終了したいと思います。今日はご来場いただきありがとうございました。